

上社と下社のこと

井 本 英 一

平成10年になって奈良県天理市の黒塚古墳の調査概要が発表された。それによると、黒塚は前方後円墳で、全長約130メートル、後円部径約72メートル、高さ約11メートル、前方部幅約60メートル、高さ約6メートル、埴輪、葺石はない。石室は合掌式の堅穴式で長さ約8.3メートル、小口幅約1.3～0.9メートル、高さ約1.7メートル、割竹形木棺の長さは約6.2メートル、直径約1メートルある。出土した鏡だけについていうと、画文帯神獸鏡1枚と三角縁神獸鏡33枚が出土した。

この黒塚と対をなすものとして引き合いに出されるのが京都府相楽郡山城町の椿井大塚山古墳である。この前方後円墳は昭和28年工事中に多量の鏡が出土し、京都大学が通知を受けて調査したものである。全長約185メートル、後円部径約75メートル、前方部幅約73メートル、埴輪、葺石はない。石室は長さ約6.8メートル、幅1.1メートル、高さ約3メートルある。鏡は内行花文鏡と方角規矩四神鏡のほか32枚以上の三角縁神獸鏡が出土した。

二つの前方後円墳には類似した特徴がいくつかある。ことに三角縁神獸鏡の個数やそれ以外の鏡の数はそれが著しい。二つの古墳は4世紀に築かれたものらしい。二つは同一の設計者によって築成されたものではない。しかし、二つの古墳の築成年代は、黒塚の方が古く大塚山古墳の方が新しいことには異論はないであろう。両古墳に埋葬された人物は実在の人物で大王家に近い

人物であった。両古墳の成立年代の差は30年前後と考えられるので、他の同時代の古墳と同じように祭祀は絶えることなく行われていたであろう。両古墳間は距離は25キロほどある。

私はこの二つの古墳はやがて特殊な聖性を具えるようになり、4世紀末から6世紀末に至る200年間、為政者によって上社と下社として祭られたのではないかと思うようになった。二社の祭神は大王クラスの人物ではなく、その地域に祭られた武功のあった人物で、都市の守護神として崇められるようになった。

これらの神は鎮守の神として村・城・都市の守護神となったのであろう。守護神はさらに始祖神と見なされたであろう。鎮守の神が氏神と同一視されるのも自然の流れである。鎮守の神は中国や朝鮮の城隍神に相当するものであろう。中国にはそれぞれの都市に城隍廟があり、都市の守護神である城隍神を祭る。このような都市神は古代西アジア文明にも広く見られ、日本の一処二祭場と同じ型が伝承されている。

古代エジプトでは、王の即位式は北エジプトを象徴する神社と南エジプトを象徴する神社で行われた。新王は北エジプト社においては北エジプト王のいでたちで現れ、南エジプト社においては南エジプト王のいでたちで現れた。片方の神社には先王の遺骸（ミイラ）が安置された。二つの神社には、王朝時代は王家の祖先が祭られたが、前王朝時代からこの神社は存在した。その時代の神社は、城隍廟のようなものであったと考えられる。

王朝時代の南北両エジプト社は、ナイル川のアシを用いて作った仮小屋で、儀式のあとは破壊され除去された。二つの神社は全く同じものではないが、全面に2本の高い柱が立っていた。周囲はヨシでつくった垣根がめぐらしてあった。南エジプトの神社の方が華麗につくられていた。南北両社では即位式が行われるばかりか、セド祭（王位更新祭）も行われた。セド祭は王の即位後30年して行われたが、その間隔は王によってもっと短い場合もあった（H. フランクフォート『王権と神々』シカゴ、1948年、20-21, 80-81, 95-98頁）。

上社と下社のこと

エジプトの南北二社は、天皇が即位式を行う大嘗祭の悠紀殿と主基殿に似る。両殿のちがいは千木その他に見られるが外観は殆ど同じである。エジプトと同じように、先帝の遺体あるいはそれに代わるものが安置される時代があったかも知れない。大嘗宮の祭神があるのかどうか不明であるが、皇祖を祭る儀がある。床を敷いて枕を用意するので、かつては聖婚が行われたと考えられる。天子の死と再生の儀礼が、先帝の遺骸と新帝の聖婚とその結果としての神の子（天子）の誕生で象徴された。

エジプトのギザにあるカフラー（ケフレン）王のピラミッド複合には下神殿（河岸神殿）とピラミッドの前面にある上神殿（葬祭殿）の二つがある。上下の神殿の間には約500メートルの参道がある。参道はもとは両側に板石を立て、上を板石で覆ったトンネルであった。参道のあとは、同じ場所にあるカフラー王の息子メンカウラー王のピラミッド複合体にも残っている。カフラー王の父 クフ王（ヘロドトス『歴史』によれば兄，2. 127）複合体には痕跡はないが、本来はあったと考えられる（三笠宮崇仁『古代エジプトの神々』日本放送出版協会，1988年，91-94頁に参道の写真とピラミッドの分布図がある。J. P. ロエール『ピラミッドの謎』酒井傳六訳，法政大学出版社，1973年，98-102頁）。

上神殿と下神殿は、いずれも王の遺体がナイル川を渡った西岸にある。西岸はあの世であり、下神殿であの世に入る死の儀礼を行い、長く暗いトンネルを経て上神殿であるあの世で再生する儀礼を行ったのであろう。ファラオ（王）があん世でも王であるために、上下神殿は上下両エジプトの神社とも考えられたであろう。暗いトンネルや上神殿にあった花園が臨死体験者が語るあの世の入り口での体験にもとづいていることは別に論じた（「臨死体験と文学」『夢の神話学』法政大学出版社，1997年）。

下神殿はミイラの作業所で、それは屋根の上であり、屋根石に排水溝の跡と穴があるのがその証で、そこにはテントが張られていたという意見がある（ロエール，前掲書，111頁）。下神殿での儀礼はこの説が示すように、上神殿での再生儀礼を前提とした死の儀礼である。下神殿には旧王の遺体と新王

が入った。上神殿では旧王が再生して新王に乗り移った。旧王は一方ではあの世で蘇り、一方ではこの世の王の中に化現した。大嘗宮の再生のイデオロギーと類似する。

ヘロドトスはエジプトのヘラクレス神（ヘロドトスはエジプトの神々をその属性が類似するギリシアの神々の名で呼んだ）のことを正確に知りたいと思い、海路フェニキアのテュロスに渡った。この地のヘラクレスの神社の前には、2本の巨大な角柱が立っており、一本は黄金、他の一本は闇の中でも輝くエメラルドでできていた。テュロスには、タソス（トラキア北部の島）のヘラクレスの異名をもつ別のヘラクレス社もあった。ギリシアにも二種のヘラクレスの神社があり、一方は不死のヘラクレスを祭り、他は死すべき半神のヘラクレスを祭った（2. 44）。

ランプシニトス王（ラメセス3世）の建立したヘパイストス神の神社の西の楼門には高さが11メートルある二つの像が立っていた。一つは夏の像、他は冬の像と呼ばれた。夏の像は鄭重に扱ったが冬の像には全く逆の扱いをした（2. 121）。テーバイ州のケンミスの町のペルセウスの神社の楼門に巨大な石像が二基立っていた。ペルセウス神がこの神社に現れると、神が穿いていた90センチほどのサンダルの片方が残っていたという（2. 91）。

エジプトの両社は、ギリシアの両社と同じように、死の儀礼を行う社と再生・不死の儀礼を行う社の二つから成っていた。神社の前には巨大な楼門があった。それは東大寺の大仏殿（金堂）と南大門と8メートル以上ある左右の仁王像とそれぞれの仁王像に奉納された90センチほどの片足わらじと対応する。仁王像は一方は開口、他は閉口である。開口は死を象徴し閉口は生を象徴する。エジプトでは、神社が二つある場合と一つの場合があった。一つの場合は、楼門の二つの像が生と死を象徴した。それは日本の場合も同じである。

仁王像もペルセウス神も片方の履き物で代表される。人体（神の体も含めて）は片方の半分が生を、他の半分が死を表わす。開口の仁王のわらじは死を象徴し、閉口の仁王のわらじは生を象徴する。仁王像に向かって口の中で

上社と下社のこと

紙をよく噛み、小さい紙つぶてをつくって吹きつける風習がある。うまく像にくっつけばよいとされた。本来紙つぶては弾丸であるので死を象徴する仁王にだけ吹きつけたと思う。しかし生と死の表象が忘れられて久しいため、両方の仁王に向かって区別なく紙つぶてを投げるようになったのである。南宋の救国の英雄岳飛は宰相の秦檜しんかいによっておとし入れられて獄死する。岳飛を祭る岳飛廟で秦檜（夫妻）が檻の中に繋がれ、参詣人の罵詈をあびる。エジプトのヘパイスツス神の社の夏の像と冬の像の伝統が史実と一体化して表現されている。

ヘロドトスはいう。古代のバビロンの町はまん中をユーフラテス川が流れ、二つの部分に分かれていた。町の両区域の一方には王宮があり、他の区域には神殿があった。神殿は八層の塔になっており、最上階には神社があった。神社の中には美しい敷き物をかけたベッドがあり、横に神像はなく黄金の卓が置いてあった。夜は神によって選ばれた女が一人そこに侍り聖婚が行われた。同じものがエジプトのテーバイにもあり、女は人間の男とは決して関係をもたなかった。このバビロンの神域にはもう一つの神殿があり、そこには巨大な神の座像が安置され、黄金の机や椅子や足台が傍に置いてあった。神殿の外には黄金の祭壇があり、さらにもう一つ大祭壇があった。大祭壇では成長した家畜が供えられた。黄金の祭壇では乳離れしない幼獣が供えられた。この神域には5メートル30センチの純金の像があった（1. 180-183）。

バビロンは町をはじめとして神殿や祭壇にいたるまで二元論的な双分制の上に成り立っていた。聖と俗あるいは死と（再）生の二元主義が根本にあったにちがいない。一つのジググラトの頂上にある神社には神床があり女性が侍った。小泉和子「古代の寝台しょう一床一」『月刊百科』（平凡社、1982年、9月号）にいう。日本の古い神社でも神座のしつらいには寝台が使われた。伊勢神宮の場合、御床は長さ八尺一寸、横四尺三寸、高さ一尺で2枚の脚を打ちつけた俎のようなものである（平安初期の『皇太神宮儀式帳』、南北朝期の『貞和御飭記』）。寸法は2台並べて安置された（『東大寺献物帳』）聖武天皇使用の正倉院に残る御床とほぼ同じで、2台並べて据え上に布団を敷いた。

御床は斗帳の中に置かれた。住吉大社，賀茂神社，宇佐八幡宮，石清水八幡宮，春日大社なども同じような御床と斗帳が設けられている。出雲大社や熊野本宮のように，床を使わず畳と衾だけのものもある（20－22頁）。水野正好「前方後円墳の成立」『東アジアの古代文化』38号（大和書房，1984年）にいう。後代の例であるが，大嘗会に当たり枕・冠・帯・沓を配した寝床の傍にいま一基の寝床を据えてやすむという儀礼があった（73頁）。

神床も2台から成っていて2元論の原理に立っている。古くは死の床と再生，誕生の床であったと推測できる。のちになり，死の床も再生の床も，その上では同じ聖婚が行われるようになり，本来の意味が忘れ去られたと思われる。本来は新王は先王の死体が横たわる死の床に共に臥し，先王と共に冥界に降り，再びこの世に帰還して黄泉^{よみ}がえりをしたあともう一つの床で女神と聖婚し神の子をもうけることになっていた。女神は神としての新王と交わるのであるが，選ばれた女性の巫女がこの役を果たしたであろう。イシュタルが冥界に降り死んで地下に帰った穀霊タンムズを地上に連れ帰って再生させ，神社の境内に設けた舞台の神床で，夫であり子であるタンムズと聖婚し宇宙のリズムを元に戻す神聖劇は王の死と再生の儀礼の前提になっていた。

別の考え方もできる。先王が亡くなってから3日間は，他の民族の例と同じように，王の靈魂は枕許にいてまだ遺体からは完全に分離しない。新王は先王の遺体の傍に臥し，この靈魂を自分の身体に移し入れる。先王の靈魂が新王に完全に移動したあと，新王は，オイディプス王がしたように，実母と別の床で聖婚し父王の再生した新王となる。実母との聖婚がタブーとされた。女神あるいは巫女との間に生まれる神の子は，280日を待たないと誕生しないが，先王の死後行われる聖婚ではまだ先王の枕辺にいる靈魂が新王を通じて女神の母胎に入った結果生まれる。すなわち先王の再生と見なされたのである。王は女神と交會することによって女神の精を身に受け，神の列に加わるので先王の後継者となることができる。先王の死の直後，新王は王位継承を宣言するが，冬至や新年に改めて即位式や戴冠式を行うのは神の子の誕生と合わせた行事であろう。

上社と下社のこと

13世紀のカンボジアには古い聖婚の儀礼が残っていた。王の在位期間は王が亡くなるまでと考えられるようになったが、以前はエジプトの例に見られたように30年あるいは20年を限度とする場合もあった。ギリシアの場合は古くは8年を限度とした。別の文化では1年を限度とし、さらに古くは1日を限度として王を取り替えた時代があった。聖婚は王の交替するたびに行われた。

カンボジア王宮の中央にはピメアナカスと呼ばれる金塔が立ち、パプオンと呼ばれる同規模の金塔が王宮の外側にあった。王宮を含んだアンコール・トム（壮大な都城）の中心には高さ45メートルの金塔バイヨンが立っていた。国王は毎夜金塔ピメアナカスに行って臥した。塔には九頭一体の蛇が住んでおり、女の姿になって王と交會した。2回の時報のあと王は塔を出て自室に戻り妻妾と寝ることができた。もし蛇の精が現れなければ王の死期が近づいたことを意味した。もし王が一夜でも塔にゆかなければ、必ず災いがあった（周達観『真臘風土記』和田久徳訳注、平凡社、1989年、18-20頁）。13世紀のカンボジア王の王権は一日限りのその名残で、王と女神の交會がない場合は王の空位を意味した。それは秩序から外れた混沌であったので災厄を見た。カンボジア王は古くは王宮の外にある金塔パプオンで妻妾と交會したのであろう。

プルターク（46-120頃）の『英雄伝』「アルタクセルクセス」（河野与一訳、岩波文庫、1956年）に次のようにいっている。ダリウス二世が死んでからしばらくしてアルタクセルクセス二世はパサルガダイに出かけて、ペルシアの祭司から王としての秘儀を授かろうとした。その神殿は戦いの女神アテナ女神を祭る神殿で、秘儀を授かる人はこの神殿にきて自分の上衣を脱ぎ、昔キュロス二世が王になる前に着ていた上衣を身につけ、イチジクの乾燥果を食べ、テレピン油を含む樹枝を噛み、酸乳をコップに一杯飲んだ（3）。

アケメネス朝の建国の祖キュロス二世が即位式のさいに身につけたマントは伝世された。子孫の皇帝の即位式においては、新王は必ずこのマントをまとった。マントには、キュロス二世の霊魂が沁みついでいて、新王がそれを

身につけると、キュロス二世の霊魂から始まって代々皇帝に受け継がれた霊魂が新王の身体に移った。イチジクの乾燥果は小麦が主食になる以前の主食で、テレピン油は覚醒作用のある薬剤で人を現実から遊離させたいらしい。酸乳はアルコール度は低いが一種の発酵酒であろう。

アケメネス朝の宮殿であったペルセポリスの西北約5キロに位置するナクシェ・ロスタムにはダリウス一世を始めとする5人の帝王の巨大な磨崖墓が5基残っている。これらの磨崖墓の前にゾロアスターのカアバと呼ばれるアラビアの聖郡メッカにあるカアバ神殿と同じ石造物が立っている。アケメネス朝の諸王の遺体はまずこの石造物の中に安置され、新王が先王の霊魂を受け継いだ。そのあと、遺体は墓に移されたのであろう。プルタークが伝える新王の儀礼は同じゾロアスターのカアバの中で行われたのであろう。カアバは日本の大嘗宮にあたる。

ナクシェ・ロスタムから約60キロ東北にキュロス二世が建てたパサルガダイの宮殿跡が残っている。パサルガダイというのはペルシア人の町の意で、ギリシア語の呼び名ペルセポリス（ペルシア人の町）に対する古代ペルシア語であった。キュロスの宮殿の西北隅にソロモンの牢獄と呼ばれる崩落しかかった高さ13メートルの石造物がある。この牢獄はナクシェ・ロスタムのゾロアスターのカアバと同じものである。二つの石造物はペルシア人によって建てられたものではなく、ペルシア人がこの地に南下する以前に栄えたエラム人によって建てられたものと考えられる。

二つのカアバ石造物は、エラム時代は一体のものであったかも知れない。二つは上社と下社としてエラム人に信仰されていたと考えられるからである。現在イランはイスラムの世界になっているが、テヘラン南方150キロのコムChomの聖廟とテヘラン東北800キロのマシハドMashhadの聖廟が二大巡礼地になっている。二大巡礼地はイスラム以前のゾロアスター教時代から存在し、コムにはアナーヒター女神、マシハドにはアナーヒター女神と天神アフラ・マズダーの間でできた神の子ミスラMithra（ミトラ）の廟があった。イスラムの時代になり、マシハド廟はそこで殉教したシーア派第八代教主リザーの廟とされ、コム廟は受

上社と下社のこと

難したリザーを訪ねてマシハドに向かう途中この地で倒れたリザーの姉ファティマの廟とされる。

14世紀のモロッコの大旅行家イブン・バットゥータはイランのマシハドを訪れ次のような記録を残している。リザー廟の前にはアッバース朝のカリフ・ハールーン・アル・ラシードの墓がある。シーア派の人々はリザー廟に詣でる前にアル・ラシードの墓を足蹴にしてから廟前にぬかずく（イブン・バットゥータ『三大陸周遊記』前嶋信次訳，角川文庫，1961年，173頁）。リザーが殉教したのは818年で，ハールーン・アル・ラシードがカリフ職に在ったのは786—809年であるのでやや時代のずれがあるが，中国の岳飛廟と秦檜廟の同類であるといえることができる。

イブン・バットゥータはイラクのクーファを訪れた。ここはカリフ・アリーが兇漢イブン・ムルジャムに刺された所である。大礼拝堂の前にチーク材でかこった祭壇があり，そこがアリーが刺殺された場所である。クーファの墓地の西側には真黒になった所があり，白い平地の中で目立っている。そこはイブン・ムルジャムの墓地で，町の人々は毎年7日間その墓の上で火を焚きつづけるといふ（イブン・バットゥータ，前掲書，90—91頁）。クーファの一処二祭場はカリフ・アリーと彼の殺害者の二つの墓で表象される。恐らく南イラクのこの習慣はシュメール・アッカド時代以来のものと考えられる。イスラムでは遺体を焼くのはもともと呪われる行為である。イスラム以前の習慣は，イラク南部にも波及した拝火教＝ゾロアスター教を含めて，祭儀の一つの段階であった。火を焚いたあとの炭と灰は穢れの象徴であったので，死と再生の儀礼における死の儀礼に属するものである。

ゾロアスター教の教義の中にアメレタート（不死）とハルワタート（全体，健全）という一対の概念がある。ハルワタートは健全を意味するが全体の崩壊を前提とするので不死に対する死を意味することになる。アケメネス朝のダリウス一世は王位を篡奪した偽スメルディスを6人の同士と共に殺し王の位についた。6人の同士の中にオタネスという者がいた。彼は家柄といい資産といい，ペルシア人の中で最上流に属する人物であった。オタネス家はダ

リウスが王位に即いたあとは自由独立のままでペルシアの法律に背くことはしないが、王の支配を受けない特権をもっていた（ヘロドトス，3.68-72，80-83）。アケメネス家とオタネス家は二つの宮殿を形成し，国家の祭りは両家の祭祀を経たのち完了したのである。オタネス家はアケメネス家と婚姻を結ぶだけでなく，アケメネス家の大事に際しては犠牲に立つこともあったであろう。

護雅夫『遊牧騎馬民族国家』（講談社，1967年）にモンゴル系の契丹^{きつたん}が建てた遼国の君主の即位儀礼である柴冊儀^{しさいぎ}を紹介している。柴冊儀には吉日が選ばれるがその前に柴冊殿と壇を置く。壇は薪を厚く積み三層につくりその上に壇を置き，長さ百尺のフェルトと竜文のある四角のしとねを敷く。皇帝は再生室に入って再生儀をおこなう。それが終わると八部の長老たちが前後左右に供奉して冊殿の東北隅に導く。皇帝は太陽を拝し終わると馬に乗るが，外戚の長老を選んで御者とする。皇帝は疾走して仆れる。御者と従者はフェルトでこれを覆う。皇帝は小高い丘に登り大臣と諸部の長老は儀杖を列して遙に拝する。皇帝が即位することを受諾すると宴が張られる。翌日皇帝は冊殿から出て臣下に助けられて壇に登り，祖先の神主^{いはい}を奉じて竜文のある四角のしとねに置く。宰相は群臣を率いて環状に立ちフェルトのふちを持って中にいる皇帝を祝福する。つづいて尊号を皇帝に進め，群臣が万歳を三唱して宴が張られる（97-98頁）。

これが『遼史』巻四十九，志第十八に見られる柴冊儀に関する記述である。遼の皇帝の即位にも二つの神殿を必要とした。一つは再生室でその中で皇帝は再生儀を行うのであるが，原文ではその直前に又置再生母后搜索之室の文がある。イシュタル女神が死んで地下に降った殻霊である自分の夫であり子であるタンムズを探し求めて冥界に降り，自分もタンムズも再生して地上に戻ってくる神話を想起する。即位する皇帝は母であり妻である女性に扮した巫女にかしずかれて再生したのであろう。再生室で皇帝は女神によって再生の儀礼を受ける。

再生室のほかに柴冊殿があり，原文によれば前面に三層の薪を積んだ塔が

上社と下社のこと

立ち、その上に壇を置いた。壇上には席があり、つまり神祠が建てられそこに百尺のフェルトが敷かれ四角いしとねが敷かれた。柴冊殿にはベッドの記述はないが神床はあった。それは東北隅に敷かれたのであろう。神床の上で神霊を身に移す秘儀が執り行われたであろう。太陽を拝んだあと皇帝は馬を疾走させた。外戚の長老を御者に選ぶが（途中でついてこられなくなり）御者を死なせる。原文のこの個処の読みは三品彰英の読みを採った（『神話と文化史』三品彰英論文集 第三巻，平凡社，1971年，518頁）。御者になる老人はペルシアのオタネス家のような家の者で，大事に際して王家の犠牲になったのである。皇帝が仆れたのではない。皇帝は再生室と柴冊殿で仮死状態になっている。

長老は王に代わって死に，従者は死体をフェルトで巻く。フェルトは羊膜あるいは日本神話で天孫がそれにくるまって降りてきたといわれるマトコオフスマに当たるもので，代死を遂げた長老が皇帝に代わってフェルトにくるまったのである。皇帝をフェルトでくるむ行事はそのあと三段の壇上の席で群臣らが王家の神主と共に皇帝をフェルトに乗せて持ち上げることで終わる。

遼の柴冊儀では再生室と柴冊殿と壇の三つが見られる。バビロンのジグurat神殿は2基あり，下神殿の外には黄金の祭壇があり，さらにもう一つ大祭壇があった。遼の場合，再生室と柴冊殿が一对の神殿で壇は祭壇が巨大化したもので，祭壇上の神祠で最終の再生儀礼が行われた。

張光直『古代中国社会—美術・神話・祭祀—』（伊藤清司・森雅子・市瀬智紀訳，東方書店，1994年）にいう。殷代の王族は10個の集団に分かれ，各々は十干に因んで名づけられ，祭祀，政治，族外婚上の単位を構成していた。王位はこの10個の集団の間で交替に継承されたが，その集団はさらに二大別され，一方は乙^{いっ}という血統の集団によって，また一方は丁^{てい}という血統の集団によって支配されていた。このような王族の二分割は小屯の宮殿—宗廟の複合の配列や西北崗の王墓に関する説明となるものであり，また殷代の礼制が新派と旧派による交替制を採っていたことの説明ともなるであろう。

殷周時代の美術に認められる両龍の原理は殷代の王制の原理によって説明できる。王家が二分されたとき、王家の祖先たちは別の世界（天界）においても同様に二分されて配置されたであろう。シャーマンが王族に奉仕するために一方の世界から他方の世界に往来する際、彼らは二分された王家の双方に配慮することを余儀なくされたのである（121頁）。

アケメネス朝のダリウスの王家はオタネスの家をいわば影の家系として温存していたことは前述した。いっぽう、アケメネス朝の創始者であるキュロス二世の家系と偽スメルディスを仆して王朝を再興したダリウスの家系は別の家系であった。しかし、両方の家系が並立して交替して政権を保持したというのではない。殷代の制度はどちらかというところエジプトの制度に近い。殷代でもシャーマンは一処二祭場の礼制をとった。乙の王家と丁の王家はそれぞれの宗廟を祭ったが、政権を担った王家は自分の宗廟だけでなく相手の宗廟も祭った。王家の祖先たちも二分されたというが、二種類の祖霊や神が存在したことになる。王たちは、さらには人民も、祖先祭りは一処二祭場の原則に立つことになった。両龍は両王家の祖先獣であるが、双分制が成立し発展すると、全く同一のものではなく雌雄や生死などを象徴するようになったと思われる。

中国の都城には必ずあって日本の都城にはないものがある。それは皇帝以下が都城で行う国家的祭祀の設備である。唐の長安城の皇城の東南部に太廟があり西南部には太社があった。これは宗廟・社稷しゃしよくで、『周礼』冬官「考工記」匠人の条に左祖右社とあるのがこれである。中国の都城にはこれが必ずある。北京の紫禁城の城外東南には天壇があり清朝までは天子が冬至に天地を祭った。同じく北東には地壇があった。南郊と北郊の祭りで郊祭と呼ばれるもので前漢の後期から定着した制度であった（西嶋定生編『奈良・平安の都と長安』小学館、1983年、208頁）。

長安城における一処二祭場は太廟と太社であった。エジプトの上社と下社、フェニキアの二つのヘラクレス社などと比べるとかなり変容している。殷代の二王家二宗廟ともちがう。天壇と地壇で代表される一処二祭場は、天を象

上社と下社のこと

徴する宗廟と地を象徴する社稷の二祭場と同じものである。明の世宗嘉靖9年（1530）北京城外の天壇祈年殿の南にある建造物をもたない圓丘壇と北郊の地壇が建てられて現在に至るまで良好な状態で保存されている。圓丘壇は三層の円壇から成り高さは5メートル、壇は上ほど小さくなる。地壇は四角い二つの壇から成り、溝で囲繞されている。

それより100年ほど前の明の成祖永楽18年（1420）天壇祈年殿が建てられた。三層の円壇の上に三層の建造物（祈年殿）が立つ。円壇の垣は円形であるが、敷地は四角で南側の壁は方形である。祈年殿は天円地方の象徴を内蔵しており、この場所で天子は天と地を祭った。100年後に圓丘壇と地壇が建造されてからも、清末に至るまで天子は天壇祈年殿で天地を祭り、冬至には祖先を春分には農作を夏至には雨を天帝に祈願した。

18世紀の蘇州城内の城隍廟は俗に大廟といった。士庶のお礼詣りは真情を尽くし香火の盛んなことは他の神廟に十倍百倍した。廟には大堂と二堂があって、ともに城隍の神像が安置されており、清明節、中元節、十月朔の三節には二堂の像を担いで厲壇れいだんに向かった。城隍の寝宮には夫人の塑像が安置されていてこれを後宮という（顧禄『清嘉録』中村喬訳注、平凡社、1988年、91-92頁）。

厲壇というのはその地方の創建のときに戦って戦死した無縁の戦士を祭る廟で、三節の冥界降りるときには、二堂の像を担いでいった。二堂の像は死んでは蘇る殻霊で、冥界に降りて再生して地上に帰ってきたのである。城隍廟には別に後宮があり、女神像が安置してあった。女神（夫人）は死んで冥界に降った子であり夫であるタソムズを蘇らせて地上に連れ戻すイシュタル女神に当たる。『清嘉録』の記述からは夫人像の役割や二堂の像の意味は読みとれない。大堂に祭られた像は祖霊であり父であり夫である神の像であったと考えられる。城隍廟と厲壇は一对の祖霊廟を形成し、前者は生、再生を象徴し、後者は死を象徴したのであろう。前者は天の祭りを受け後者は地の祭りを受けた。大堂と二堂是一对の社で、父と子を象徴するが、ここでは父は死を子は再生を意味した。一処二祭場の原理が錯綜した観がある。

中華人民共和国成立前の南モンゴルで行われた悪魔払いの仮面劇チャムも一処二祭場の原理で行われた。原山焯『モンゴルの神話・伝説』（東方書店、1995年）にいう。昔インドで一つの寺が建立された。建立に尽くした人たちは厚く表彰されたが、血と汗を流して働いた牛は全く顧みられなかった。牛は人間に生まれ変わったら仏教を破壊しようと呪詛しつつ死んだ。その牛が転生したのがチベットのランダルマ王だという。ランダルマ王は国内の寺廟を破壊し、経典を焼却し、ラマを殺害するなどの暴政をほしいままにした。一人の仏僧がこれを深く憂慮し、仮面をつけて踊りランダルマ王を刺殺した。

このできごとを演劇化したチャムが寺の内庭で行われる。麵粉でつくったランダルマ王の屍体を片隅の台の上に乗せる。楽の音と共に仮面をつけた神仏が現れる。屍体が中央に移され鹿の面をつけた者が屍体に切りつける。髑髏の装いをした踊り手が寸断された屍体を四方にまき散らす。最後は神仏がもう一度出てきて総踊りをし、跳鬼と呼ばれる午前の部が終わる。午後の部は送鬼と呼ばれる。登場するのは青い面に小さい角のあるガルダ（迦楼羅、こんじちよう金翅鳥）のみである。ガルダは長い蛇を口にくわえ、両手で蛇をもてあそびながら踊る。ガルダはランダルマ王の屍体の首と手足を切り離し、全身を寸断する。かくしてラマや仮装した神仏たちはランダルマ王の残骸と降魔杵を野原に運び焼く（218－220頁）。

屍体を小麦粉をねってつくるのは、穀霊の人形をつくることで、世界に同じ習慣が多く見られる。穀霊の人形を寸断して野原にまくのは、イモ栽培文化や穀物栽培文化の神話で、イモを芽の部分をもついくつかの小片に切って畑地に埋めたり、一粒の穀物からとれた多数の穀粒をまくのと同じである。穀霊は毎年鎌で刈りとられ非業の死を遂げるので、一方ではイエスのように人の罪、穢れを背負わされて殺される身になったり、ランダルマ王のように怨霊の化身にされたりするのである。

寺院の内庭で行われるランダルマ王の屍体の寸断は仮面で扮した者によって行われる。寺院が異界であるばかりか仮装者全てが祖霊でありトーテムである。午前の部の跳鬼の儀礼は死の儀礼で、午後の送鬼は再生の儀礼で神送

上社と下社のこと

りの儀礼である。あの世から黄泉がえりをした穀霊の儀礼であり、もう何の役にも立たない抜け殻の残骸と法具は焼却する。

高句麗では仏教が信仰されており特に淫祀を好んだ。神廟は二か所あり、祭神は夫餘神といって夫人の木像であり、もう一つは登高神といって始祖で夫餘神の子だという。両方とも役所を置いて役人を派遣し守護させている。二神は恐らく河泊の女と朱蒙であろうという（『周書』高麗伝、『北史』では登高神は高登神につくる。『東アジア民族史』1,2 正史東夷伝、井上秀雄他訳注、平凡社、1974年、1976年）。

遼の柴冊儀では再生室と柴冊殿の二つがあったが、さらに再生母后搜索之室というものがあり女神が祭られていた。再生室と柴冊殿（先学によって日本の大嘗宮に相当することは繰り返し述べられている）を出た皇帝は小高い丘に登って即位する。皇帝は女神（夫餘神）の子登高神にあたる。『清嘉録』によると蘇州の城隍廟は大堂と二堂の二つのほかに後宮があり夫人（婦人）像が安置してあった。夫人像は夫餘神にあたる。二堂の像が登高神で再生する神であった。

女神とその夫であり子である男神を二つの神廟に別々に祭るのが本来であるが、エジプトにはすでに二つの異なる価値をもった像を楼門に安置する習慣があった。朝鮮では天下大將軍と地下女將軍の二つの神像が、内と外（聖と俗）の境界である村や寺の入口に立っていた。朝鮮の二体の木像はエジプトの夏の像と冬の像に対応するが、エジプトで冬の像が足蹴にされるようには、朝鮮の木像に対してはなされなかった。朝鮮の場合、二本の柱の上に人間の顔を彫ってあるので祖霊あるいは神を表わし、村を守護しているのがわかる。この木像は長生標ともいい新羅末高句麗初（10世紀前半）の石磧長生標ともつながり、今日でも堂山や造山という聖所として残る。ときに長生といっしょに細長い棒が立っていて先端に鴨といわれている木彫の鳥が止まっている（秋葉隆『朝鮮民俗誌』名著出版、1980年〈1954年〉）。

東大寺南大門の左右の楼門に立つ8メートル余りの仁王像やエジプト、中国の楼門や堂に安置されている像を見てきたが、それらは発達した形式で朝

鮮の木像の方が古い形式であることが推量できる。朝鮮においては、二本の木像のある場所に鳥杆といって頂上に木彫の鳥を付けた棒が立っている場合がある。鳥杆の同類は東南アジアのアカ族の村の入口などにも見られそれが日本の鳥居と同じ出自であることは以前に論じた。鳥は天界の神の使者と考えられる。使者であると同時に神そのものを指した。鳥は風としても表現された。鳥や風は人間の最初の祖先とされ、最初のトーテム、始原の神とされた。北アメリカ・インディアンの集落や墓地あるいは個人の住居の入口に立つトーテム・ポールの頂上に翼を拡げたサンダーバードが置かれ、その下に各部族や民族に固有のトーテムがつづく。外者がトーテム・ポールを見た場合、同族であるかどうかはすぐに分かる。サンダー・バードは雷を呼ぶ鳥で、雷は神のことである。

中国は小正月までの2週間（時代と地域によって差異があり、12日の場合もあった）を二分して、前半部は死の儀礼にあて後半部は再生の儀礼にあてた。1月7日は死の儀礼の最終日であると同時に再生の儀礼の初日でもあった。1月7日は一年最初の処刑日であった。魏時代の『問礼俗』によると、正月1日を鶏となし、2日を犬、3日を羊、4日を豚、5日を牛、6日を馬、7日を人となし、……とある（宗懐『荆楚歳時記』守屋美都雄訳注、布目潮颯他補訂、平凡社、1978年、43頁）。

古代中国では、1月7日の人日まで、最初のトーテムである鳥から次々と転生したのである。ゾロアスター教の勝利の神、道の神、旅人の神であるウルスラグナ神は十変化して人の姿となった。王の再生である即位式では十変化が王自身によって演じられた。ウルスラグナは最初風の姿で現れる。つぎに雄牛の姿で、3番目に馬の姿で、4番目に駱駝の姿で、5番目に猪の姿で6番目に15歳の成人の姿で、7番目にワール（ソ）ガン鳥の姿で、8番目に雄羊の姿で、9番目に雄山羊の姿で、10番目に戦士の姿で現れる（『アヴェスタ』ヤシュト 14.1-27）。古代イランの場合は十日正月の形で再生儀礼が行われ、中国の人日にあたるのは6日目の成人の日で、10日に再び戦士の姿でしめくくった。

上社と下社のこと

朝鮮の鳥杆は神そのもので、その左右に天下大將軍と地下女將軍を従える三尊形式になっているのである。これは一処二祭場から発展した三社形式の起源になる。東大寺南大門の一对の仁王が本来の神仏であったのが、金堂に大仏を祭ることによって三尊形式となり一对の仁王は門神に格下げされた格好になる。中国、朝鮮、日本の天子が二つの神殿を祭るとき、天子こそ神の子で神そのものであるので大嘗宮のような二つの宮殿は天子が再生するために必要な装置になる。

朝鮮の村の神は村の入口に立つ男女の木像だけではなかった。例えば平安北道（中国東北部に隣接する北朝鮮北西の道）博川の鷹峰洞という村は内洞と新洞に分かれ、それぞれが山腹の上堂と川近くまたは里近くの下堂をもっているが、それは男女両神とまでは考えられていない。これに対して江原道の江陵（韓国がわ）の邑城隍は新羅の名将金庾信^{きんゆしん}を祭神として丘上にあり、南大川のほとりには川の龍女神を祭った女城隍があった。その郊外の玉衛理にある一对の城隍に至っては全く夫婦神と観念され、夜間村人は二神交合の声を聞くとさえいわれている（秋葉、前掲書、49頁）。日本では逢坂山の蟬丸神社を下社とし姉の逆髪を祭る上社とするくに境の二社がある。姉の逆髪（坂神）が年に一度弟神を訪ねて聖婚をする（福田晃『京の伝承を歩く』京都新聞社、1992年、16-20頁。金関丈夫『文芸博物誌』法政大学出版局、1978年、43-50頁、311頁）。福田、前掲書によると、旧加茂川下流の氾濫原に設けられた祭場に五条天神社と道祖神社があった。天神社は男系の巫覡や陰陽師に祭られ、道祖神社は女系の民間宗教者たちに齋かれた（27頁）。

金峯山は山上ヶ丘（大峯山）から山下と呼ばれる吉野にかけての地域で、古くは山上の蔵王堂と山下の蔵王堂は一体をなすものであった。戦後山下吉野の蔵王堂が独立し、山上ヶ丘の方は明治維新以来大峯山寺と称して別組織になっている。金峯山では山上、山下ともに修験道の本尊である蔵王権現を祭る蔵王堂が中心になっている。しかし蔵王権現は吉野の主神でなかったと考えられている（上田さち子「蔵王権現と龍神」『月刊百科』1991年1月号、平凡社、4-5頁。久保田展弘『山岳霊場巡礼』新潮社、1985年、109-141

頁)。

金峯山の山上、山下の蔵王堂は一処二祭場の原理の上に立っているが山岳信仰の行者によって祭られていたせいか元の姿を知り難い。吉野山の蔵王堂には高さ8.5メートル、7.9メートル、7.4メートルもある巨大な木彫の像が安置される。その由来はほとんど分かっていない。前二者に後一者が足されたことは伝説・説話や後世の文書によってこれを知ることができる。二体の巨像は今までアジア各地で見てきた男女あるいは生死を象徴する像である。残りの一体は前者二体と共に三尊形式を形成するのであろう。三体とも蔵王権現とする必要はない。山岳信仰は出羽三山にしても熊野・新宮・那智にしても一処三祭場から成立する場合があります考慮に値する。

秋葉、前掲書の三神山の章にいう。朝鮮では古くから金剛山、智異山、漢拏山が三神山と称せられ、中国では蓬萊、方丈、瀛洲が神仙が住む東海の三神山とされる。このほかに秋葉は自らが踏査した徳物山、松岳山、鶏龍山の三山を神聖な三神山とする。そこには神聖な生活をいとなむ特殊な人々が住んでいる。

徳物山は北朝鮮の開城の東南2里にある200メートルほどの丘で山上に崔瑩祠があり中に塑像を安置する。祠の傍に寝室があり土地の人は処女に侍らせる。女性が老病なら少女に替える。女がいうところによると、夜になると神霊が降下して彼女と交婚するという。山麓に城隍祠があり山上の祠と一対になっている。朝鮮にも上社と下社の一処二祭場があり、神床が設けられてかつては聖婚が行われたことが分かる。他の文化圏でも同じような聖婚が行われたことは前述したとおりであるが、神床が上社や下社の社殿の中にある場合と、社殿と離れた別棟にある場合がある。中間に天を置いて三尊形式をつくろうとする契機をその中に読みとることができる。朝鮮の場合は崔瑩祠は浄らかな神霊を祭り下社の方は穢れた鬼神を祭るとされる。

さらに秋葉、前掲書はいう。朝鮮での牛や豚を供えて神を祭る風は朝鮮本来の祭り方ではなく、中国の祭祀の輸入であるらしい。重要な供物といえはやはり米と酒であった。かつて秋葉が教えた京城大学の裏の駱駝山の麓に秋

上社と下社のこと

葉も住んだとことのある東嵩洞という部落があった。この村の村神の神域である山の頂上に神岩がある。村祭りのときそこには生臭ものは供えない。下にある聖所には肉類が供えてあるのが見られた。そこで上の方が位の高い神で肉類の好きな方は下の方にあるだという（294頁）。朝鮮の他の城隍祠も上社、下社の形式をもつ所では似たような供物が献じられたであろう。供えた供物は神前で神と共に食う風があり、神酒を神前で飲むのを飲福といっている。

朝鮮の山上あるいは山腹の城隍祠あるいは祠廟と山麓やまみやのそれは日本の山宮と里宮と同じ形式をとっている。山宮は山の頂上あるいは中腹にある神社で里宮は山麓にある神社である。日本では季節ごとに神が山宮から里宮に降りまたもとの山宮に帰る神幸つまり神のお旅が神事として演じられる。死者の霊魂が山に帰って祖先神となるが春の到来と共に里に降りて田の神となる。秋の収穫と共に再び山に帰り山の神となる。田の神は里にあるときは穀霊と同一視されるが、穀物は完熟する前に刈り取られるので、穀霊は毎年非業の死を遂げて祖霊の住む山に帰らなければならない。人間は秋の収穫物を神（田の神＝穀霊）と共食する。非業の死を遂げた穀霊は新しい穀霊を食べて再生し、人間も秋から初冬にかけて宇宙の衰退と連動して死の状態に近づいた所を新しい穀霊を摂取して再生するのである。神人共食をすませた田の神は再生して山に帰る。

『旧約聖書』「創世記」にカインとアベルの物語がある。エバはアダムを知って孕りカインを生みさらに弟アベルを生んだ。アベルは羊を飼いカインは土を耕した。カインは土の実りを主に献げた。アベルは羊の群れの中から肥えた初子を献げた。主はアベルとその献げ物には目を留めたがカインとその献げ物には目を留めなかった。カインは怒り弟のアベルを野に連れ出して殺した（4・1－8）。アブラハムの子イサクはリベカと結婚しエサウとヤコブの双子をもうけた。弟は母の胎を出るとき兄エサウのかかと（アケブ）をつかんでいたのがヤコブと名付けられた。エサウは巧みな狩人となりヤコブは天幕の周りで働くのを常とした。父イサクはエサウを愛した。

アベルとエサウは家畜を飼育し、山の動物、野獣を狩りして肉を神や父に捧げた。しかも、二人のうち一人は殺され、一人は長子権を放棄して弟に隷属した。カインとヤコブは農耕民として二人と対立する。アベルとカインは山宮と里宮に祭られる神で、アベルの殺害はカインを再生させるために必要な儀礼であった。エサウとヤコブの対立の場合、「創世記」ではヤコブは兄を失脚させ事実上兄を殺害したのと同じ行動をとる。カインとヤコブは、一方は兄で一方は弟であるが、里宮で農耕民の代表として祭られる人であり神であった。

紀伊の熊野本宮は、明治22年の熊野川の大洪水の結果、^{おおゆのはら}大斎原が流出し今の場所に移された。大斎原は熊野川の岸に近い場所にある中洲で、岸からは渡るための橋もなく、尊卑の別なく浅瀬を跋涉して中洲にあった社殿に詣でた。大斎原は社殿のある場所は樹木が伐採されて整地されたが、周辺は原生林がとり巻き野生鹿が生息していた。4月13日から15日までの大祭では、かつては鹿の屠殺が行われたらしい。山宮の特徴である死の儀礼の1つで、人に代わってトーテムを殺したと考えられる。

伊勢神宮の祠官である内宮の荒木田氏と外宮の度会氏が伝承した山宮神事では、饗膳式が通常の祭式とは逆に祭りの初めにあり、後宴である神人共食の直会の部分を欠く。これは葬儀での食い別れの儀式と同じである。これに参列した祢宜は三日間の潔斎を経なければ神宮の御饌奉仕に預かることはできなかった。帰りも服忌路を通らなければならなかった。これも触穢を示していた（民俗学研究所編『民俗学辞典』東京堂、1951年、646-647頁、山宮）。荒木田・度会二氏は、伊勢神宮の再生儀礼に先立って、神宮の祖先（獣）を殺す儀礼を行ったのであろう。熊野の場合、古くから本宮と熊野川下流の新宮の対偶があり、山宮と里宮の関係にある。現在はこのことに関する記録は何も残っておらず、ただ推測によるばかりであるが、そのような構造の中にあつたというる。

信州の諏訪大社といえは勇壮な御柱祭^{おんぼしらさい}で有名である。この祭りは上社と下社両方の社殿の四隅に山から曳き降ろした巨木を立てる神事である。4月上

上社と下社のこと

旬と5月上旬に行われる御柱の木落としと曳行と建御柱の神事は広く知られている。上社だけで4月15日（旧3月の酉の日）にもっとも重要な御頭祭おんとうさいが行われた。祭りでは75頭の鹿の頭が供えられ、神饌は禽獣魚介数十台に及んだという。これらの饗膳おほほうりに大祝をはじめ神使、神官、氏人らがあずかった。このあと大祝と神長じんちやうが神使に諏訪神の神霊の象徴を渡す。神使は多くの神官、氏人に見送られて馬に乗って郷村巡回に進発する（三輪盤根『諏訪大社』学生社、1978年、97-98頁。谷川健一編『日本の神々』9、美濃・飛騨・信濃、白水社、1987年、155-156頁）。

諏訪大社の神社における多数の鹿の殺害は山宮における祖先獣の殺害に端を発するもので、これらの供え物は神人共食をしないのが特徴である。それは古い葬儀を伝承したもので、神使に神霊を送ったのは、殺害された祖先獣のもつ新しい力を神使に送り、神を賦活・再生させるためであった。「創世記」において主ヤハウエがアベルの肉の供物を喜んだり、父イサクが長男エサウの肉を好んだとあるのは、カインとヤコブの再生のための山宮の葬礼と霊力の移行が背景にあった。

日本における両墓制では、第一次墓地に参詣人各自が小形の自然石を土饅頭の上に置き、のちになってそれらの石を第二次墓地にもってゆく習慣の地がかなりある（前掲『民俗学辞典』674-675頁、両墓制）。第一次墓に置く石の一つ一つは殺害する動物を象徴した。第二次墓にそれを運ぶのは死者の再生をはかったのである。2つの墓は山宮と里宮を表わした。インドのニューデリーにあるインド独立の志士マハトマ・ガンジーの廟には、本体の墓と並んで一区画があり、そこには参詣者が持参した小児の頭大の石が多数置いてある。スピルバーグ監督の映画『シンドラのリスト』の最終部で、強制収容所の生き残りのユダヤ人や関係者がそれぞれ拳大の石を持参し、地面と同じ平面に設けられたシンドラの墓石の上に整然と並べて置く場面があった。

京都の上賀茂神社と下鴨神社は『延喜式』神名帳に「賀茂別雷神社」「賀茂御祖神社二座」とある。上社に一社、下社に二社の三社形式をとっている。熊野三山では上社にあたる熊野本宮大社と下社の熊野速玉神社はやたまと熊野那智大

社の三社形式をとる。諏訪大社の場合は上社と下社に分かれるが、上社は前宮まへみやと本宮ほんぐうの二つから成る。上社の重要な祭儀は古くはことごとく前宮で行われたが、今は本宮に移り往古の盛況を垣間見ることもできない。しかし主だった祭儀は前宮に出向して行われ、御頭祭も前宮で行われる。下社は秋宮あきみやと春宮はるみやの二社から成る（三輪，前掲書，68－89頁）。諏訪大社も古くは三社形式をとっていたのではないかと思われる。前宮の一時的な衰えに乗じて本宮を建てたかも知れないからである。出羽三山神社の場合は前三者ほど一体性をもたないし，成立の前史も不明な点が多いので考察からは除外してよいであろう。

上賀茂神社と下鴨神社に関しては谷川俊一編『日本の神々』5，白水社，1986年所収の大和岩雄「鴨別雷神社・賀茂御祖神社」（11－41頁）を参照した。上社・下社の区別は平安朝最初期にはすでに成立していた。分社の理由を国家の宗教政策の結果とする説（井上光貞）は比較の立場をとれば認められない。賀茂社は飛鳥・奈良時代から存在したことは種々の文献からうかがい知ることができる。

奈良時代，賀茂の神の崇りを鎮めるために馬に鈴をかけ，猪の頭をかぶって駈ける祭りをした。すると崇りがおさまり天候もよくなって豊作になった（『秦氏本系帳』の賀茂祭りの記事，『本朝月令』所引）。大和氏はこれは先住の山人の狩猟儀礼で荒々しい祭りであったのが賀茂氏の進出で復活したのだらうと考える（18－19頁）。「創世記」のアベルやエサウの狩猟を想起させる。丹後の一の宮この籠神社の大祭は賀茂祭にならった古式の祭りといわれ葵大祭という。この祭りには暴れるだけの獅子舞が登場するが鈴木棠三は「賀茂の猪頭に学んだものという」（『日本年中行事辞典』）と書いている。大和氏は賀茂祭では禁止になった猪頭行事をこの地の人々が籠神社で行うようになったと解釈する（20頁）。奈良時代の賀茂祭は乱暴すぎて禁止されたが，平安時代の賀茂祭は風流を尽くし華美になったので禁止の宣旨が出たほどであった。

上賀茂神社の神事の一つに御阿礼みあれ神事がある。この神事は5月15日の大祭

上社と下社のこと

の3日前の夜、神社の北西8町の山中に設けられた四間四方^{みあれどころ}の御生所で行われる。神事が終わっても神の依代である阿礼木（榊）が本社へ神幸することではなく二か所の社に立てるので、榊御幸はこの二か所への神幸神事である（24頁）。御生所にはかつては神館^{こうたち}があり、齋王をつとめた式子内親王の『新古今集』巻三の歌「忘れめやあふひを草にひき結びかりねののべのつゆの曙」にあるように、齋王は神館で一夜をすごした（26頁）。

神館すなわち齋院では神婚が行われた。神社における古い型の猪の屠殺と御阿礼神事は一見何の関係もないように思われるが、トーテム獣の殺害と神の再生・復活という古い形式が発展したものである。山宮である上社で殺害される猪は神の本来の姿であった。猪を殺し、猪の身体にひそむ若く猛々しい靈魂を宇宙の運行に連動して衰弱した神に送り込み神を再生させたのである。神はこの場合、再生のエネルギーを身に受けて神の子として再生した。これが御阿礼神事であったと考えられる。

祖先獣の代わりに人が供犠されたかも知れない。獣であれ人であれ、祖先を殺した場所は古い墓で、ここで死者との食い別れが行われ、死者は新しい生に再生する。神婚は死者、祖先の靈魂である神の靈が齋女の胎内に入り再生する神事であった。それは、カトリックの3月25日の受胎告知と12月25日の神の子キリストの誕生に比較される。ヨセフと婚約した処女マリアを訪れた天使ガブリエルは、彼女が聖靈を宿したことを告げる。キリスト教では受胎して40週あとに出産するので科学的である。御阿礼神事では、神婚の直後に神の子があれますという象徴的な経過をたどる。

天照大神が新嘗の祭りをするとき、スサノヲノミコトはこっそりと神殿に糞をした。また大神が齋機殿^{いみはたどの}で神衣を織っていたとき、スサノヲは斑の馬の皮を剥いで屋根に穴をあけ投げ入れた。大神は驚いて梭でからだを傷つけて（死に）天の岩戸に入ってしまったので世の中がまっ暗になった。別の伝承によると、ワカヒルメノミコトが機を織っていると、スサノヲが斑の馬の皮を剥いで御殿に投げ入れたため、ワカヒルメは機から落ちて梭でからだを傷つけて死んでしまった。そこで天照大身は怒って天の岩屋に入り扉を閉じた

ので、世の中がまっ暗になった。別の伝承では、スサノヲは大神の新嘗の祭りの座の下に糞をしたので、座に座った大神のからだ臭くなった。

ワカヒルメというのは、若いヒルメのことで、天照大神をオホヒルメノムチといったので、大神の若い他我であった。太陽がいちばん衰弱する冬至の祭りでは、若い太陽の精霊を殺してそのエネルギーを老いた太陽に移す儀礼が行われた。若い太陽の精は天の馬でもあった。天の馬は太陽を曳いて天空を駆けるばかりでなく、太陽の祖先獣とも見られたのであろう。太陽の再生のために、馬や人を供犠した習慣があったことを暗示している。死体から流出する血液や汚物と生皮で祭場を穢したあと、神事が始まった。

『播磨国風土記』賀毛郡の猪養野いかいのの条にいう。難波なにわの高津の宮に天の下を治められた天皇（仁徳天皇）のみ世に、日向ひむかの肥人くまひと、朝戸君あさべのが天照大神のいます船の上に猪を持参して献上し、猪を飼うべき場所を賜わるよう願い出た。そこでここを賜わり猪を放し飼いにしたので猪飼野という。

この記事に出る猪の献上は、伊勢神宮に猪の膏と毛皮を献上した起源を述べたものであろう。船の上に座す天照大神とあるが、船が海や川に浮かぶ実際の船かどうか考えてみる必要がある。神宮では天照大神のご神体は御船代みふねしろに安置してある。御船代は船形棺を模したもので、その中にはいつでも再生できる大神の死体が入っていて、この御神体に猪（の毛皮）を献上したと見ることができる。

荒木田氏による祖先祭祀が山宮と里宮で行われたが、山宮の祭祀が内宮儀式に移されたときこのような形をとることになったと考えられる。内宮と外宮が成立してからは、度会氏の山宮での祖先祭祀は薄れてゆき、内宮の再生儀礼の中に吸収されたのであろう。京都の上賀茂神社の御阿礼神事と同じことが内宮でも古くは行われたと推測できるが、秘儀に属することでもあり、ことに明治以降の典礼から外された可能性もあるので、これ以上進ことははばかられる。

法隆寺西院伽藍の西約350メートルに位置する6世紀後半の藤ノ木古墳の発掘が始まったのは1985年のことであった。1989年4月30日の日本文化財科

上社と下社のこと

学会第6回大会（奈良大学）最終日、前園実知雄氏（当時奈良県立橿原考古学研究所主任研究員）は藤の木古墳の石棺の底に獣皮が敷かれていることを明らかにした。獣皮は二体の遺体のうち北側被葬者の下に敷かれていた平絹に付着していた。それは数センチ角の断片数点で、細かくヒビ割れし炭化したように黒ずんでいた。同研究所は脂肪酸分析による動物の種別鑑定を急いでいる（『読売新聞』89.5.1）。被葬者の1人に欽明6年（545）、百済で虎退治をしその皮をもち帰った膳臣巴提便かしわでのおみはずひがおり、その関連が注目されると同新聞はつづける。

二体のうち北側の方は20歳前後の男性で南側の方は性別年齢不詳の大人らしい。二人は副葬品の位置から見て同時に埋葬されたと考えられる。二人の骨の遺存度から、二人の埋葬時期の差を考えることはできない。二人の副葬品を区別することは難しいが、やや確実なものとしては、北の方の鏡三面、南の方の鏡一面であろう（『斑鳩 藤の木古墳 第一次調査報告書』奈良県立橿原考古学研究所、1988年、443頁）。

若い北の方の遺体の下に獣皮があった。今までの理論では、北の方は一種の殉死者のような人物で、その力を南の方に移す役割を与えられたということになる。ただ副葬品の鏡の枚数が南の方より多いことが気になる。魂を移転する結果、北の方の鏡三枚は南の方のものになるので、そのことについて考えるべきであるかも知れない。自分の愛児を虎に連れ去られたために虎退治をした巴提便を北の方とするには年齢が若い感じがする。

藤の木古墳と同時期とされる古墳からも獣皮が出土した。奈良県大和高田市の大谷古墳群の円墳（6世紀後半）で獣皮と見られる炭化した有機物の塊が出土した。古墳からの獣皮確認例は大阪府の土保山古墳（熊皮）や藤の木古墳（種別不明）しかなく、藤の木の獣皮の種別検討に大きな手がかりになりそうである。この円墳の墳丘中央部の地下約1メートルで長さ2.14メートル、幅70センチの木棺跡を発見した。遺体はほとんど残っていなかったが二体以上の歯やあごの骨が出土し、周辺に朱の塊もあった。獣皮らしい有機物は被葬者の上半身あたりで確認され、長さ90センチで炭化していた。6世紀

後半という時期や複数埋葬など藤ノ木古墳と共通点が多い。(『読売新聞』89.5.25)。発掘担当者である宮原晋一氏(当時奈良県立橿原考古学研究所技師)によると、この獣皮は藤ノ木古墳の石棺底にあった獣皮によく似ており、敷き物に使われたものだという。

獣皮が死体かけられたのか、死体の下に敷かれたのかは問わない。被葬者が複数であるのに、いずれの場合も獣皮は一枚なのである。天照大神が冬至の到来と共に心身ともに衰弱していたとき、スサノヲが投げ込んだ斑駒の皮に驚いてワカヒルメつまり若い太陽女神が死に、太陽神天照大神は天の岩屋に隠れる。そのあと、死んだ他我であるワカヒルメの魂が大神に移り大神は復活する。

『日本書紀』によると、天武天皇の最晩年に^{みむろのとの}御窟殿と^{みむろのま}御窟院という二つの建物が出てくる。殿とか院とかいうからには、宮中の建物に相応しいものであった。しかも二つの建物は一對のものらしかった。窟というのは、出入口が一つしかなく、窓もない洞穴を想像させる構造である。神話時代の天の岩屋を想起させる。二つの建造物は、天武天皇の発病から崩御の短い期間に出てくるので、病気治癒や再生・復活の祈願に関するものであったに違いない。

天武14年9月18日天皇は大安殿に出御し王卿らを召して博戯をさせ、10人に天皇自身の衣と衿を賜わった。19日、皇太子以下諸王卿48人^{ひぐま やましし}に熊と山羊(かもしか)の皮を賜わった。24日、天皇が病気になったので三つの寺で誦経させ稲を納めた。10月8日^{おけら}白朮を煎じて薬をつくった。10月24日、白朮煎じたものをたてまつり鎮魂をした。^{あかみどり}朱鳥元年1月2日、天皇は大極殿で諸王卿に^{あとなしこと}無端事(なぞなぞのようなもの)を尋ね、答が当たった王らは、多くの衣料を賜わった。18日、宴会があり天皇は御窟殿に出御し、倡優たちと歌人たちに物や衣料を賜わった。7月28日、修行者70人を選んで出家させ宮中の御窟院で設齋した。9月9日、天皇の病いはついに癒えず崩御した。

博戯というのは双六のような勝負ごとで、天皇を病気から健康に引き戻すための闘争儀礼であった。天皇は身につけた衣料を次々に与えてお祓えをした。獣皮を諸王卿に賜わるが、これもお祓えであり再生儀礼であった。1月

上社と下社のこと

2日に行ったなぞなぞも混沌から秩序に戻るための儀礼で、正解者には祓えの衣料を賜わった。なぞなぞで有名なのは、知らずして父を殺したオイディプスに対してスフィンクスが出したなぞなぞで、それに答えたオイディプスは父の王国と母を手に入れた。天皇の病が癒えないので、御窟殿と御窟院で歌舞と齋会を設けたがついに天皇は崩御した。この二つの殿院は宮中にあった一对の御殿であったがこれ以上の記録がないので詳細は分からない。

京都御所内裏には清涼殿じじゅうでんと仁寿殿いしばいのだんに石灰壇ひがしひさしがある。清涼殿の東廂南端の二間、仁寿殿の南廂東端の二間は、地上から土を盛り上げて表面を石灰で固め、西側の昼の御座の板敷きと同じ平面にしてある。石灰間（『中右記』『春記』）とも壇間（『西宮記』）ともいわれ、天皇は毎朝、沐浴のあと直接足が地につかないように内侍が敷いた大床子の円座に座し、伊勢神宮と内侍所を遙拝した。東側には御簾や蔀をつり、南側の殿上の間との間は壁になっていた。西側は御簾と四季屏風が設けられ、北川は開放されていた。南一間の中程、壁に向かって1尺ばかりに径2尺深さ2尺ばかりの穴が穿たれ塵壺と呼ばれた。塵を掃き入れたのでその名が生じたが、古くは火を燃して料理をした（『國史大辞典』1, 1979年, 吉川弘文館, 『日本大百科全書』2, 1985年, 小学館, 『大百科辞典』2, 1932年, 平凡社）。

石灰壇は、かつて天皇の居所であった東西に並んだ仁寿殿と清涼殿にあった、仁寿殿は建礼門、承明門、紫宸殿を結ぶ南北の中軸上に位置したので格式は上であった。いずれも天皇が皇祖と神鏡を拝した場所であるので祭場とってよい場所である。仁寿殿の方に天皇は最初住んだが、のちに清涼殿に住むようになった。建物の構造上、二つの御殿には石灰壇は付いていたので一処二祭場の形式にのっとりたものといえる。石灰壇はアラビアのメッカにあるカアバ神殿やイランのナクシェ・ロスタムとパサルガダエにある同類のカアバや韓国慶州にある瞻星台と同じもので、へそ石の上に祠廟や宮殿が建てられたものである。イランの場合、古代ペルシア帝国が創立されたときすでに二つのカアバは存在したと考えられる。二つのカアバはペルシア帝国以前のエラム王国にもあったといえる。ペルシア帝国はエラム王国から一処二

祭場を引き継いだ。一処二祭場はメソポタミアにもエジプトにも見られたので、死と再生の儀礼を行う祭場の起源は有史以前にさかのぼると考えられる。

〔付記〕

平成10年6月12日付の各紙によると、滋賀県守山市の伊勢町で二棟ずつが並び30年間隔で建て替えられていたと考えられる祭殿の遺構が発見されたと市教委から6月11日に発表された。土地の名前が伊勢町であり、そのことから20年ごとに遷宮する伊勢神宮の祖型と見なされている。一処二祭場の形式が二世紀末から三世紀初頭にかけてすでに見られることは注目に値する。

エジプトのファラオの王位更新式が30年ごとに行われ、その際にファラオが上社と下社に参詣したことは上述したとおりである。伊勢町の遺構は長さ8.6-9.1メートル、幅4.6-5.0メートルで高さは推定約12メートルあった。建物跡には柱穴12個が長方形に並び中央に1個の柱穴があった。中央の柱は構造上のものでなく伊勢神宮の床下にある心御柱しんのみはしらに相当するもので、30年ごとに建て替えられる本体であったと考えられる。

Dual Shrines in the Ancient World

Eiichi IMOTO

Pharaoh of Egypt, the King of Kings of Persia, the Emperor of China, and the Emperor of Japan acceded to the throne after visiting dual shrines; in ancient Greece and the Near East there were a pair of shrines, one representing death, the other representing life; two statues of man and woman or death and life stood at the entrance gate of the temple, the palace or the village as well; those passing through the gate were ceremonially cleansed; in Japan there are the Yamamiya (Mountain shrine) and the Satomiya (Village shrine) of dualistic origin; many old Japanese shrines have upper shrines and lower ones; they completed a ceremony of death and rebirth after worshipping the dual shrines.